

國學院大學學術情報リポジトリ

胡仔『孔子編年』について：
編年の手法を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 洋司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000887

胡仔『孔子編年』について

—編年の手法を中心として—

青木洋司

諸書に見える孔子の言行の編年は難事である。基本的な史料となる『論語』は語録であり、時期の記述を欠いている。これは『礼記』『孔子家語』などの諸書も同様であり、時期の多くは不明である。

この問題に対して『史記』孔子世家は、「孔子年某」「明年」、あるいは魯公の年数を記すことで、部分的に編年を行っている。しかし、孔子世家以降、同種の著作は久しく各種の芸文志や蔵書目録に確認できない。ところが、南宋の胡仔の『孔子編年』以降、明の潘府『孔子通紀』、清の狄子奇『孔子編年』などが作成されている。

そこで、本稿では、孔子の言行を生涯を通じて編年した著作の先駆となった『孔子編年』の編年の手法などを検討する。なお、底本は同治九年（一八七〇）刻本とした。

一、『孔子編年』への評価

胡仔の『孔子編年』（以下、適宜「編年」と略す）への評価を確認したい。『四庫全書総目提要』（以下、『提要』と略す）には、『編年』に対して次のようにいう。

是書輯録孔子言行、以『論語』『春秋三伝』『礼記』『家語』『史記』諸家所載、按歳編排。体例亦如年譜。其不曰年譜、而曰編年、尊聖人也。…仔独依拠經伝、考尋事實。大旨以『論語』為主、而附以他書。…仔所論次、猶為近古。故録冠伝記之首、以見濫觴所自焉。

（『提要』孔子編年）

是の書、孔子の言行を輯録し、『論語』『春秋三伝』『礼記』『家語』『史記』の諸家の載する所を以て、歳を按じ編排す。体例も亦た年譜の如し。其の年譜と曰はず

して、編年と曰ふは、聖人を尊べばなり。…仔、独り経伝に依拠し、事実を考尋す。大旨は『論語』を以て主と爲し、而も附するに他書を以てす。…仔の論次する所、猶ほ古に近きと爲す。故に録して伝記の首めに冠し、以て濫觴の自る所を見す。

『編年』は『論語』『春秋三伝』『礼記』『孔子家語』(以下、適宜『家語』と略す)『史記』に載せる孔子の言行を編年している。年譜の体例であるが、書名を「孔子年譜」ではなく、「孔子編年」とするのは、孔子を尊んだためである。経書や注釈に依拠し、事実を探求しており、古に近いため、「伝記類」の始めに置き、孔子の言行を編年した著作の起源を示したとする。

ここにいう「伝記類」とは『四庫全書』『伝記類、聖賢之属』であり、『編年』と孔伝『東家雜記』の二部のみを収録している。その先駆的な著作としての評価は明らかであろう。『編年』の影響は大きい。例えば、明の潘府『孔子通紀』では孔子の生涯を編年体で記した「正紀」では、『孔子編年』に多く従っている。⁽¹⁾

しかし、与えた影響に比べて、『編年』の研究は少ない。近年では段亜利氏『孔子編年 編纂考略』(『内蒙古農業大学学報』第六十一期、二〇一一)・「胡仔及『孔子

編年』考略」(『鄭州航空工業管理学院学報』第三十五卷、二〇一六)などがある。⁽²⁾これらの研究は『編年』の作者や伝記、あるいは編纂時期などを述べることに止まり、編年の方法や後世への影響などは充分には論じられていない。

二、胡仔および胡舜陟「孔子編年序」について

『編年』の著者は、胡仔(二〇九五—一一七〇)、字は元住、績溪(安徽省)の人、岳飛を弁護して、秦檜の怒りに触れ、獄中で死去した胡舜陟(一〇八三—一一四三)の次子である。父母の死後、苕溪に閑居し、苕溪漁隱と号した。著作は『孔子編年』五巻のほか、『苕溪漁隱叢話』前集六十巻、後集四十巻である。

『編年』には胡仔の序文は存在せず、父の胡舜陟の序文「孔子編年序」のみが存在する。その序文に次のようにいう。

雜出於『春秋三伝』『礼記』『家語』与夫司馬遷世家。而又多偽妄。惟『論語』為可信、足以証諸家之是非。余令小子仔採摭其可信者、而為『編年』。…余嘗考『論語』郷党一篇、見聖人動作威儀之則、至纖・至悉。及

其他篇、見其所謂子之燕居、申申夭夭、子温而厲、威而不猛、子与人歌、子所雅言之類、皆弟子所記。而聖

人動容周旋中礼、瞭然在人目前。学者得以取法也。…。

〔『編年』巻首「孔子編年序」〕

『春秋三伝』『礼記』『家語』と夫の司馬遷の世家に雑出す。而れども又た偽妄多し。惟だ『論語』のみ信すべきと為し、以て諸家の是非を証するに足る。余、小子の仔をして其の信すべき者を採摭し、而して『編年』を為らしむ。…。余、嘗て『論語』の郷党の一篇を考ふるに、聖人の動作・威儀の則、至纖・至悉なるを見る。其の他篇に及び、其の所謂る子の燕居は、申申天天、子は温にして厲しく、威ありて猛からず、子、人と歌ひて、子の雅言する所の類を見るに、皆な弟子の記す所なり。而れども聖人の動容・周旋、礼に中たり、瞭然として人の目前に在り。学ぶ者、以て法を取るを得しむるなり。…。

孔子の言行は『春秋三伝』『礼記』『家語』『史記』孔子世家に見えるものの偽妄が多い。『論語』のみが信じるに足る書である。そこで、子の胡仔に孔子の言行を取捨させ、『孔子編年』を作成させた。『論語』の諸篇では、郷党は孔子の動作・威儀が周到に記されおり、述而の一連の言行は弟子の記録であるが学ぶ者の手本とする。

「孔子編年序」に従えば、『編年』は、胡舜陟が命じ、胡

仔が制作した著作である。また、諸書に見える孔子の言行において信用できるのは『論語』のみであり、それを取捨させたとする。さらに、郷党や述而の言行を学ぶ者の手本としており、この二篇を重要視している。

『編年』の書名の由来は、『提要』では、孔子を尊んだため、『孔子年譜』ではなく、『孔子編年』と題したとする。しかし、『孔子編年序』、『宋史』の胡舜陟・胡仔父子の関連記述、『苕溪漁隱叢話』には、書名への言及は皆無である。孔子を尊んだためとするのは難しいだろう。

三、『孔子編年』について

(一) 構成

『編年』五巻の構成を確認したい。巻一は誕生から四十三歳まで、巻二は四十四歳から五十五歳まで、巻三は五十六歳から六十七歳まで、巻四は六十八から六十九歳まで、巻五は七十歳から七十三歳の死去、及び、孔子の息子の孔鯉から前漢の孔驩までを付随して記している。

巻一から巻五の孔子の年齢は統一されていない。例えば、巻四は他の巻と比べて六十八歳・六十九歳の二年のみと明

らかに短く、『論語』の引用は多い。卷四には胡仔の意図を見出すことも可能である。ただし、他の卷には意図を見出しがたく、また『編年』に論評などは存在しない。卷ごとに意図を見出すことは容易ではないだろう。

なお、『編年』には孔子の全ての歳に記事があるのではない。〔辛亥、魯襄公二十三年、年二。〕〔編年』卷二〕とするように、二、五、七、八、十二、十三、十四、十六、十七、十八、二十一、二十三の計十二年は、干支、魯公の年数、孔子の歳のみが記されている。

(二) 同治九年刻本

現在、主に通行している『孔子編年』は同治九年刻本と『四庫全書』所収本の二種である。同治九年刻本のみには、胡舜陟・胡仔父子の子孫、胡培鞏（一七八二—一八四九）の付けた注釈と、その事情を示す「孔子編年後序」とが存在する。

「孔子編年後序」には、幼い時に『編年』を読むことができず、後日、南北を遊歴した際に、書肆で求めたが、それでも果たせなかった。その後、巨費を惜しまず、書写したことを述べている³⁾。続けて、注釈の方針を次のように述べる。

補脱字数十、正譌数十。其中与今本文異、而義可逼者、則不敢擅改。恐当时所拠之本、与今本異也。…原編無注。今悉以所出書名、及後人考論聖蹟之說、足相証者、略注於下。〔編年』卷末「孔子編年後序」

脱字数十、正譌数十を補ふ。其の中、今本の文と異なり、而も義逼るべき者は、則ち敢へて擅に改めず。恐らくは当時の拠る所の本、今本と異なればなり。…原編に注無し。今、悉く出ずる所の書名、及び後人の聖蹟の説を考論し、相ひ証するに足る者を以て、略ぼ下に注す。

『編年』の誤字・脱字などを補った。しかし、今のテキストと異なる場合は勝手には改めていない。また、『編年』には注釈がないため、引用している孔子の言行の典拠を示し、後人の説を加えたとする⁴⁾。

ここにいう「後人の聖蹟の説」とは、朱熹「論語序説」や金履祥「論語孟子集註考証」、江永「群經補義」などであり、引用の多いのは鄭環『孔子世家考』である。後に検討するように『編年』は『史記』孔子世家に多く従うため、引用したのであろう。

次に胡培鞏の付けた注釈を孔子三歳の条から確認したい。

壬子、魯襄公二十四年、年三。父叔梁紇卒。「家語」本姓解、孔子三歳而叔梁紇卒。」葬於防山。防山在魯東。「孔子世家。」

〔『編年』卷一、□は割注〕
壬子、魯の襄公二十四年、年三。父の叔梁紇卒す。「家語」本姓解に、孔子三歳にして叔梁紇卒す、と。」防山に葬むる。防山は魯の東に在り。「孔子世家なり。」

父の叔梁紇が孔子三歳の時に卒した典拠は『家語』本姓解から、防山に叔梁紇を葬った典拠は『史記』孔子世家からと、割注の形式で典拠を示している。ただし、「孔子三歳にして叔梁紇卒す」のように『家語』本姓解の該当記述を示すのは少ない。通常は「孔子世家なり」のように典拠のみを記す。

なお、孔子三歳の条では引用されていないが、孔子世家に議論のあるところは、先ほど記した鄭環『孔子世家考』などを引用している。

(三) 引用書目

孔子三歳の条のように、『編年』は諸書に見える孔子の言行を編年した著作である。字句を改めることはあるが、それぞれの言行には典拠がある。

ここでは、引用されている典拠を確認したい。『提要』

では『編年』の典拠を「『論語』『春秋三伝』『礼記』『家語』『史記』の諸家」とし、その中でも「大旨は『論語』を以て主と為し」としていた。胡培翬の注釈を手掛かりに、引用されている典拠を多い順に並べると次の通りである。⁵⁾

- (1) 『孔子家語』七十条
- (2) 『論語』五十六条
- (3) 『史記』「孔子世家」四十三条、「仲尼弟子列伝」二条、「老子列伝」一条
- (4) 『礼記』二十七条
- (5) 『春秋左氏伝』二十六条
- (6) 『孟子』一条
- (7) 『公羊伝』一条(「何休序」)

『春秋三伝』ではなく、『春秋左氏伝』であることを除けば、『提要』の指摘は概ね正しい。ただし、胡舜陟のいう「惟だ『論語』のみ信すべきと為し」に対して、胡仔は『論語』の引用も多いが、それよりも『家語』や『史記』の引用が多い。もちろん、引用の多寡は重視した順ではない。しかし、最も引用されているのは、胡舜陟の「信すべき」とする『論語』ではなく『家語』である。つまり、胡舜陟と胡仔との態度は一致していると言えない。

なお、孔子の弟子の記述は『史記』仲尼弟子列伝ではな

く、『家語』七十二弟子解に従っている。ここでは、孔子の言行の典拠に限定したため、引用書目では除外した。

四、編年の手法について

(一) 孔子六十二歳の編年

『編年』以前に孔子の言行の編年を行ったのは『史記』孔子世家（以下、孔子世家と略す）のみである。孔子世家は部分的であり、両書の性格は異なるが、比較し、編年の手法を検討したい。

ここでは孔子六十二歳の条を取り上げる。孔子世家では、この年は蔡から葉に行き、蔡に戻ったとし、その間の言行として、第一に葉公、第二に長沮・桀溺、第三に荷蓀丈人との対話を置く。

両書の異同を明確にするために、孔子世家と異なる箇所をゴチック体で示した。長文であるため、第一、第二、第三に分けて検討する。まずは、第一の葉公との対話である。

辛亥、魯哀公五年、年六十二。自蔡如葉。葉公問政。

孔子曰、近者説、遠者來。葉公因語孔子曰、吾党有直躬者。其父攘羊而子証之。孔子曰、吾党之直者異

於是。父為子隱、子為父隱、直在其中矣。他日、葉公問孔子於子路、子路不對。孔子聞之曰、爾奚不曰、其為人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。

（『編年』卷三）

辛亥、魯の哀公五年、年六十二。蔡より葉に如く。葉公、政を問ふ。孔子曰はく、近き者説び、遠き者來たる、と。葉公、因りて孔子に語けて曰はく、吾が党に躬を直くする者有り。其の父、羊を攘みて而して子、之を証す、と。孔子曰はく、吾が党の直き者は是に異なれり。父は子の為に隱し、子は父の為に隱し、直きこと其の中に在り、と。他日、葉公、孔子を子路に問ふ、子路、對へず。孔子、之を聞きて曰はく、爾奚ぞ曰はざる、其の人と為りや、憤りを發して食を忘れ、樂しみて以て憂ひを忘れ、老いの將に至らんとするを知らず爾か云ふ、と。

冒頭に見える「辛亥、魯哀公五年、年六十二」のように、干支、魯公の年数、孔子の年齢を示すのは、全ての年に共通する書式であり、当然ながら、孔子世家には存在しない。

第一の葉公の質問への返答では、孔子世家は「政は遠きを來たらしめ邇きを附するに在り」とする。『家語』弁政には類似の語が見えるが、『論語』子路「近き者説び、遠

き者来たる」に改めている。さらに、葉公が続けて質問したとし、『論語』子路「吾が党に躬を直くする者有り」を引用している。そして、孔子世家と同様に葉公が子路に孔子の人格を質問したことに続けるが、やはり、『論語』述而に従い、字句を改めている。

第一の葉公との対話を、この年に編年するのは両書とも同じである。しかし、孔子世家では葉公の孔子及び子路への質問は二条である。一方、『編年』は、孔子二条、子路一条であり、いずれも『論語』に従い、字句を改めている。『論語』に見える葉公との対話は全三条であるため、『編年』の引用する三条は葉公との対話の全てである。つまり、『論語』中の葉公に関連する章句を一括してこの年に編年しているのである。これは『編年』の特徴的な手法である。

続いて、第二の長沮・桀溺との対話を検討したい。

去葉、反於蔡。長沮・桀溺耦而耕。孔子過之。使子路問津焉。長沮曰、夫執輿者為誰。曰、為孔丘。曰、是魯孔丘与。曰、然。曰、是知津矣。桀溺曰、子為誰。曰、為仲由。曰、是魯孔丘之徒与。曰、然。曰、滔滔者天下皆是也。而誰以易之。且而与其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉。耒而不輟。子路行以告。夫子憮然曰、鳥獸不可与同群。吾非斯人之徒与而誰与。天下有

道、丘不与易也。(同前)

葉を去り、蔡に反る。長沮・桀溺耦して耕す。孔子、之を過ぐ。子路をして津を問はしむ。長沮曰はく、夫の輿を執る者は誰と為す、と。曰はく、孔丘と為すと。曰はく、是れ魯の孔丘か、と。曰はく、然り、と。曰はく、是れならば津を知らん、と。桀溺曰はく、子、誰とか為す、と。曰はく、仲由と為す、と。曰はく、是れ魯の孔丘の徒か、と。曰はく、然り、と。曰はく、滔滔なる者は天下皆な是れなり。而して誰と以にか之を易へん。且つ而、其の人を辟くるの士に従はんや。豈に世を辟くるの士に従ふに若かんや。耒して輟めず。子路、行きて以て告ぐ。夫子憮然として曰はく、鳥獸、与に群を同じくすべからず。吾、斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせん。天下に道有れば、丘は与に易へざるなり。

第二の長沮・桀溺との対話では、第一に比べ、孔子世家との異同は少ない。しかし、孔子世家の「孔子以て隱者と為すも」を「孔子之を過ぐ」に、「悠悠」を「滔滔」にそれぞれ字句を改め、「吾、斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせん」の記述を追加している。

孔子世家の記述をこのように『論語』微子に従い、字句

を改めている。この場合も、第一の葉公との対話と同様に孔子世家の記述に従いながらも、『論語』によつて、字句を改めているのである。

続いて、第三の荷蓀丈人との対話を検討したい。

子路從而後。遇荷蓀丈人。曰、子見夫子乎。丈人曰、四体不勤、五穀不分、孰為夫子。植其杖而芸。子路拱而立。止子路宿、殺鷄為黍而食之、見其二子焉。明日、子路行、以告。孔子曰、隱者也。使子路反見之、至則行矣。子路曰、不仕無義、長幼之節不可廢也。君臣之義知之何其廢之。欲潔其身、而亂大倫。君子之仕也、行其義也、道之不行、已知之矣。

(同前)

子路、從ひて後る。蓀を荷ふ丈人に遇ふ。曰はく、子、夫子を見るか、と。丈人曰はく、四体、勤めず、五穀、分かつたず、孰をか夫子と為さんと、と。其の杖を植てて芸る。子路、拱して立つ。子路を止めて、宿せしめ、鷄を殺して黍を為りて之に食はしめ、其の二子を見えしむ。明日、子路行き、以て告ぐ。孔子曰はく、隱者なり、と。子路をして反りて之を見せしむ、至れば則ち行る。子路曰はく、仕へずんば義無し、長幼の節は廢すべからざるなり。君臣の義は之を如何ぞ其れ之を廢さん。其の身を潔くせんと欲して、大倫を乱る。君

子の仕ふるや、其の義を行ふなり。道の行はれざるは、已に之を知れり、と。

第三の荷蓀丈人との対話では、第一、第二と比べ、孔子世家との異同は多く、記述も追加も存在する。しかし、これは胡仔の創見ではない。孔子世家には存在せずに、『論語』微子のみに存在する「子路をして反りて之を見せしむ」以下を追加しているのである。このように、第一、第二と同様に孔子世家の記述を『論語』に従い、字句を改め、記述を追加しているのである。

ここまで検討したように、『編年』の六十二歳の条では、第一の葉公、第二の長沮・桀溺、第三の荷蓀丈人の対話ともに、孔子世家に多く従う。しかし、孔子世家と『論語』に異同のある場合は、『論語』に従い、字句を改め、時には記述を追加している。つまり、この歳の編年は孔子世家に依拠しながらも『論語』に従い、改めている。また、第一の葉公との対話に見えるように関連する言行を一括して編年する手法も存在する。

(二) 孔子五十四歳の編年

『編年』には孔子世家の編年を改める場合も存在する。ここでは『編年』の孔子五十四歳の条を取り上げる。典拠

ごとに便宜的に番号を附し、孔子世家以外の典拠を原文にのみ角括弧で示した。また、孔子世家に従う記述をゴチツク体とし、長文のため、前半と後半とに分けた。まずは前半部である。

癸卯、魯定公十二年、年五十四。①孔子為司寇。②言於定公曰、臣無葺甲、大夫無百雉之城。③今三家過制、請皆損之。『孔子家語』相魯④乃使仲由為季氏宰、將墮三都。∴冬十二月、公圉成弗克。⑤子路使子羔

為費宰。∴。『論語』先進』
〔編年〕卷二

癸卯、魯の定公十二年、年五十四。①孔子、司寇と為る。②定公に言ひて曰はく、臣に葺甲無く、大夫に百雉の城無し。③今三家、制に過ぐ、請ふ皆な之を損せん、と。④乃ち仲由をして季氏の宰と為らしめて、將に三都を墮たんとす。∴。冬十二月、公、成を圉むも克たず。⑤子路、子羔をして費の宰と為らしむ。∴。

孔子世家では、この事蹟を「定公十三年」に作る。これには従わず、『左伝』に従い、その前年の「定公十二年」に改め、孔子五十四歳とする。

冒頭では、孔子を司寇とし、定公への進言を載せる。これに『家語』を一文のみ引用する。これは『家語』相魯に、①とほぼ同文を載せているため、補ったのであろう。ただ

し、それ以外の記述には従わず、孔子世家の「冬十二月、公、成を圉むも克たず」までを引用する。続けて、孔子世家の費が破壊されたとする記述を踏まえ、『論語』先進の子路が子羔（高柴）を費の代官としたことを置く。

孔子五十四歳の条の前半では冒頭において魯公の年数を改めている。しかし、定公への進言、三家の都城の破壊、十二月に魯公が勝利できなかったことは全て孔子世家に従っている。この事蹟は『家語』に類似するものが存在するものの従ってはいない。つまり、孔子世家の年数は改めているが、それに相当する事蹟は改めていないのである。また、前半部に「冬十二月」とあるため、月には注意は払われていない。あくまでも年ごとの著作である。

孔子世家は「冬十二月、公、成を圉むも克たず」で、この年は終わり、翌年の「定公十四年、孔子年五十六」に続く。つまり、以下は全くの独自の部分である。続いて、後半部を検討したい。

⑥廐焚。孔子退朝曰、傷人乎。不問馬。『論語』郷党⑦乃之火所、郷人有為火來者、則拜之。士一、大夫再。子貢曰、敢問何也。孔子曰、其來也、亦相弔之道也。吾為有司、則拜之。『孔子家語』曲礼子貢⑧定公問、君使臣、臣事君、如之何。∴。『論語』八佾⑨

又問、一言而可以興邦、有諸。：。「『論語』子路」⑩
 子路為季氏宰。：。「『禮記』禮器」⑪原思為之宰、与
 之粟九百、辞。子曰、毋。以与爾鄰里鄉党乎。「『論語』
 雍也」

(同前)

⑥廐焚けたり。孔子朝より退きて曰はく、人を傷へるか、と。馬を問はず。⑦乃ち火所に之く、郷人、火の為に來たる者有れば、則ち之に拝す。士には一たびし、大夫には再たびす。子貢曰はく、敢へて問ふ何ぞや、と。孔子曰はく、其の來たるや、亦た相ひ弔ふの道なり。吾、有司為り、則ち之に拝す、と。⑧定公問ふ、君、臣を使ひ、臣、君に事ふるには、之を如何せん、と。：。⑨又た問ふ、一言にして以て邦を興すべきこと、諸れ有るか、と。：。⑩子路、季氏の宰と為る。：。⑪原思、之が宰為り。之に粟九百を与ふ。辞す。子曰はく、母かれ。以て爾の鄰里郷党に与へよ、と。

⑥と⑦は『論語』郷党と『家語』曲礼子貢問とを一事としてゐる。しかし、燃えたのは、郷党では「廐」、『家語』では「国廐」であり、一致しない。また、前半部冒頭は「司寇」であるが、『家語』は「大司寇」である。これも一致しない。このように異なる文献に記載されている事蹟に共通性を認め、一事とするのである。『編年』には序文もなく、本

文中にも胡仔の意が示されることはない。そのため、一事とした根拠は全く不明である。

しかし、検討してみると、⑧と⑨の『論語』の引用は、この歳の冒頭に定公への進言を置くため、『論語』に存在する定公との対話二条を一括して置いたのであろう。これは先ほど検討した孔子六十二歳の葉公の場合と同様である。また文末の『論語』雍也は、包咸の注釈には司寇の時とされている⁽¹⁰⁾。包咸の注釈と冒頭の「司寇」とを合わせて編年したのであろう。以上のように考えるのが妥当である。

後半部では、⑥と⑦のように『論語』と『家語』とを一事とする。異なる文献であつても、共通性を認めることができれば一事とするのである。また、葉公の場合と同様に、『論語』中の定公の語を一括して編年している。このように、登場する人物の事蹟を一括して編年するは、その特徴と見えよう。この歳では孔子世家の編年を一年のみ改めているが、大きく異なる編年も存在する。以下に検討したい。

(三) 孔子三十四歳の編年

ここでは孔子世家から編年を大きく改めた事例として、孔子が周の都に遊学した事蹟を検討したい。まずは孔子世家である。

魯南宮敬叔言魯君曰、請与孔子適周。魯君与之一乘車・兩馬・一豎子。俱適周問礼。蓋見老子云。辞去、而老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言。∴。

孔子自周反于魯、弟子稍益進焉。〔『史記』孔子世家〕魯の南宮敬叔、魯君に言ひて曰はく、孔子と周に適かんことを請ふ、と。魯君、之に一乘車・兩馬・一豎子を与ふ。俱に周に適き礼を問ふ。蓋し老子に見ゆと云ふ。辞し去るとき、老子、之を送りて曰はく、吾、聞く富貴なる者は人を送るに財を以てし、仁人なる者は人を送るに言を以てす、と。∴。孔子、周より魯に反り、弟子稍や益ます進む。

魯の南宮敬叔は魯の君主に、孔子とともに周の都に遊学することを請い、魯の君主は車一台、馬二頭、下僕一人を与えた。彼らは周の都で礼を問うた。そのときに恐らく老子に会い、言葉を贈られたとする。末尾には孔子が周から魯に帰ると弟子が次第に多くなったことを記す。

孔子世家ではこのように周の都に遊学した歳は明確には示されていない。この前後の記述は十七歳と三十歳であるため、その間を想定していると考えられる。^①

次は『編年』である。ここでも典拠ごとに便宜的に番号を附し、全ての典拠を原文にのみ角括弧で示した。長文の

ため、前半部と後半部に分けて検討したい。前半部である。

癸未、魯昭公二十四年、年三十四。①魯大夫孟僖子将死、召其大夫而属之曰、礼人之幹也。無礼、無以立。吾聞将有達者曰孔丘。聖人之後也、而滅於宋。∴。故孟懿子与南宮敬叔師事仲尼。〔『春秋左氏伝』昭公七年〕②南宮适問於孔子曰、羿善射、奭盪舟、俱不得其死然。∴。〔『論語』憲問〕③孔子謂南宮敬叔曰、吾聞老聃博古知今、通礼樂之原、明道德之帰、則吾師也。今将往矣。∴。孔子将適周、觀先王之遺制、考礼樂之所極、斯大業也。君盍以乘資之。臣請与俱往。魯君予一乘車・兩馬・一豎子・侍御。敬叔与俱至周。∴。〔『孔子家語』觀周〕

〔『編年』卷一〕

癸未、魯の昭公の二十四年、年三十四。①魯の大夫、孟僖子将に死せんとし、其の大夫を召して之に属して曰はく、礼は人の幹なり。礼無ければ以て立つこと無し。吾れ聞く、将に達者有らんとす。孔丘と曰ふ。聖人の後にして、宋に滅ぶ、と。∴。故に孟懿子と南宮敬叔と仲尼に師事す。②南宮适、孔子に問ひて曰はく、羿、射を善くし、奭、舟を盪かす、俱に其の死の然るを得ず、と。∴。③孔子、南宮敬叔に謂ひて曰はく、吾聞く老聃は古に博く今を知り、礼樂の原に通じ、道

徳の帰を明らかにす。則ち吾が師なり。今、將に往かんとす、と。孔子、將に周に適き、先王之遺制を觀、礼樂の極まる所を考へんとす。斯れ大業なり。君益ぞ乘を以て之に資せざる。臣、与に俱に往かんことを請ふ。魯君、一乘車・兩馬・一豎子・侍御を予ふ。敬叔、与に俱に周に至る。…。

魯の大夫、孟僖子（孟釐子）は死のうとする時に孔子に言及し、聖人の子孫であり、その先祖は宋の国で滅ぼされたとした。孟僖子の死は孔子世家では十七歳であり、杜預注への疏に従い、三十四歳に改めている^④。そして、その言及の末尾に見える孟僖子と南宮敬叔（南宮适）の師事に続けて、『論語』憲問の南宮适の質問を置く。さらに、『家語』觀周に従い、南宮敬叔とともに周の都に遊学したとする。周の都への遊学の事蹟は、孔子世家ではなく、『家語』に従っている。孔子世家を必ずしも重視するのではなく、改める場合もあることが確認できる。

孔子三十四歳の条の前半部では、孟僖子の死、南宮适の師事とその質問、周の都に遊学した事蹟を一連とみなしている。編年の根拠は疏であり、異なる典拠を登場人物によって相互に関連付け、文献間に差は付けていない。

これも『編年』の特徴であろう。続いて、後半部を検討

したい。

④ 孔子將問礼於老聃。…吾今日見老子、其猶龍邪。
 『史記』老子列伝 ⑤ 孔子觀周明堂。觀四門墉、有堯舜之容・桀紂之象。…『孔子家語』觀周 ⑥ 孔子觀周、遂入太祖后稷之廟。…『孔子家語』觀周 ⑦ 伯常騫問於孔子曰、騫固周之賤史也。…『孔子家語』三怨
 ⑧ 孔子將去周、老聃問、送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言。…孔子自周反於魯、弟子精益求精焉。
 『史記』孔子世家

（同前）

④ 孔子、將に礼を老聃に問はんとす。…吾、今日老子に見ゆるも、其れ猶ほ龍のごときか。⑤ 孔子、周の明堂を觀る。四門の墉を觀るに、堯舜の容・桀紂の象有り。…⑥ 孔子、周を觀、遂に太祖后稷の廟に入る。…⑦ 伯常騫、孔子に問ひて曰はく、騫固より周の賤史なり。…⑧ 孔子、將に周を去らんとし、老聃問ふ、之を送りて曰はく、吾、聞く富貴なる者は人を送るに財を以てし、仁人なる者は人を送るに言を以てす、と。…孔子、周より魯に反り、弟子稍や益ます進む。

周の都における遊学の事蹟として、老子との対話、周の明堂や太祖后稷の廟への訪問、伯常騫との対話、老子との対話、帰国後の弟子の増加を挙げる。老子との対話は孔子

世家では「恐らく」としていた。『編年』では、老子との対話を事実として、その対話を老子列伝から長く引用する。明堂や廟への訪問は『家語』観周からの引用である。前半部の記述と合わせると観周で引用されていないのは一条である。その一条は老子との対話であり、⑧を引用したため、採用しなかったのであろう。また、観周に続けて、三恕の伯常饗との対話を引用している。『家語』の周の都における遊学の事蹟は観周および三恕の一条である。『論語』の該当事蹟を一括して編年する態度は既に検討したが、ここでは『家語』の該当事蹟を一括して編年している。

孔子三十四歳の条は孔子世家から編年を大きく改め、孟僖子の死、周の都に遊学した事蹟も改めている。これは創見ではなく、その根拠は疏である。この編年の特徴は事蹟に『家語』を多く引用することである。これまでは『論語』であったが、『家語』の該当事蹟を一括して編年している。編年の手法としては、『論語』を特別視するのではなく、文献に関わらず、該当事蹟が存在する場合は一括して編年している。

(四) その他の編年について

次に検討するのは孔子世家に存在しない編年である。当

然ながら、孔子世家は部分的な編年であり、生涯を通しての編年ではない。そのため、孔子世家には存在しない編年も多い。ここでは、孔子十九歳と二十歳の条を検討したい。

戊辰、魯昭公九年、年十九。娶于宋之丌官氏。己巳、魯昭公十年、年二十。伯魚生。昭公使人遺以鯉魚。孔子榮君之賜、因名之曰鯉、字伯魚。 (『編年』卷一)
戊辰、魯の昭公九年、年十九。宋の丌官氏を娶る。己巳、魯の昭公十年、年二十。伯魚生まる。昭公、人をして遺はすに鯉魚を以てせしむ。孔子、君の賜を榮とし、因りて之に名づけて鯉と曰ひ、伯魚と字す。

孔子は十九歳で丌官氏と結婚した。翌年に伯魚が生まれ、魯の昭公から鯉を贈られ、それに因んで鯉と名付けたとする。

丌官氏との結婚や伯魚の誕生は孔子世家や『論語』に記述はなく、『家語』本姓解のみに見える事蹟である。これに「年十九」とあるため、『編年』は従ったのであろう。また『家語』に孔鯉が生まれたのは「翌年」との記述は存在しないが、そのように考えるのが妥当である。孔子世家以外を用いた編年として、一例を挙げるならば、孔子の母を葬った事蹟は孔子世家には見えないが、『編年』では『礼記』檀弓に従った記述となっている。¹⁶⁾

これまで検討したように、編年の根拠は多くの場合、孔子世家である。孔子世家に存在しない場合に『家語』や『礼記』などの他書を用いて編年するのである。しかし、根拠が不明な編年も存在する。孔子七十歳の条である。

己未、魯哀公十三年、年七十、在魯。孔子曰、吾十有五而志於学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲不踰矩。…。(編年、卷)
己未、魯の哀公十三年、年七十、魯に在り。孔子曰はく、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず、と。…。

孔子がその生涯を述懐した有名な章句である。『論語』為政「子曰はく、吾十有五にして学に志す」を「孔子曰はく」に改めて引用し、七十歳の発言とする。「七十にして」とあることから、七十歳の条に編年しているのだろう。この章句は七十歳以降の発言ではあるが、七十歳とするのは難しいのではないか。繰り返しになるが『編年』には根拠の明示が全く存在せず、その理由は不明である。この他にも、孔子の死去は、孔子世家や『家語』終記解ではなく、『礼記』檀弓に從う⁽¹⁾。何か理由はあるのだろうか、

その理由は不明である。このように根拠が不明な編年や理由を明示し難い編年も存在する。

(五) 孔子の子孫について

最後に孔子の子孫の記述について検討したい。孔子世家・『編年』ともに孔子の生涯の末尾に子孫を記す。ここでも両書の異同を明確にするために、孔子世家と異なる箇所をゴチック体で示した。『編年』に次のようにいう。

孔子生鯉。字伯魚、年五十、先孔子死。伯魚生伋。字子思、年六十二、嘗困於宋。遂作中庸。子思生白。子上、年四十七。子上生求。字子家、年四十五。子家生箕。字子京、年四十六。子京生穿。字子高、年五十一。子高生子順。年五十七、嘗為魏相。子順生鮒。年五十七、為陳王涉博士、死於陳下。鮒弟子襄。年五十七、嘗為漢惠帝博士、遷為長沙太守、長九尺六寸。子襄生忠。年五十七。忠生武。武生延年及安國。安國為漢武帝博士、至臨淮太守、蚤卒。安國生邛。邛生驩。

(『編年』卷五)

孔子、鯉を生む。字は伯魚、年五十にして、孔子に先だちて死す。伯魚、伋を生む。字は子思、年六十二なり。嘗て宋に困す。遂に中庸を作る。子思、白を生む。

子上、年四十七なり。子上、求を生む。字は子家、年四十五なり。子家、箕を生む。字は子京、年四十六なり。

子京、穿を生む。字は子高、年五十一なり。子高、子順を生む。年五十七、嘗て魏の相と為る。子順、鮒を生む。年五十七。陳の王渉の博士と為り、陳の下に死す。鮒の弟、子襄、年五十七。嘗て漢の惠帝の博士と

為り、遷りて長沙の太守と為る、長け九尺六寸。子襄、忠を生む。年五十七。忠は武を生む。武は延年及び安

国を生む。安国は漢の武帝の博士と為り、臨淮の太守に至るも、蚤く卒す。安国は叩を生み、叩は驩を生む。

子高の子は、孔子世家では「子慎」に作るが、『家語』後序に従い、「子順」に改める。この他にも「孝惠皇帝」を「漢惠帝」に、「今皇帝」を「漢武帝」に、それぞれ改めている。孔子世家の引用が多く、さらに南宋に適した形で記述を改めている。

孔子の子孫の記述は南宋の子孫を記すのではなく、前漢の孔驩までであり、しかも孔子世家に従っている。『編年』は孔子世家に依拠する記述が多いことを示すものである。

まとめにかえて

本稿は、孔子の言行を編年する著作の先駆である胡仔『孔子編年』の編年の手法とその特徴を検討した。

『編年』には、著者の胡仔の序文は存在せず、作成を命じた胡舜陟の「孔子編年序」が存在する。孔子の事蹟について、胡舜陟は『論語』のみを信用していた。一方、胡仔は『論語』には限定されず、『史記』孔子世家、『家語』、『礼記』なども多く用いている。このように両者の態度は一致してはいない。さらに、胡仔の意は『編年』中に示されることはなく、根拠の明示も存在しない。これは『編年』を検討する上での問題点である。

『編年』以前に孔子の言行の編年を行ったのは孔子世家のみである。そのため、『編年』では最も重視されている。孔子世家に多く従い、異同のある場合は『論語』や『家語』などを用いて、字句を改め、時には記述を追加している。つまり、孔子世家に依拠し、補助的に他書を用いている。孔子世家の重視は、孔子の子孫の記述において、南宋までを記すのではなく、孔子世家に従うことからも明らかである。

ただし、孔子世家の編年を改める場合も存在する。この

場合は創見ではなく、既に存在する指摘に従っている。この他にも、丁官氏との結婚など、孔子世家には見えなくとも、他書によって補うことも存在する。このように、手法としては、孔子世家の編年を基本とし、既に存在する指摘によって改め、孔子世家に見えない編年は他書を用いているのである。

その特徴は、関連する言行や事蹟を一括して編年する態度である。葉公の場合は『論語』中の葉公が登場する章句を一括して編年する。周の都への遊学では『孔子家語』の該当事蹟を一括して編年する。『論語』を特別視するのはなく、文献に関わらず、該当事蹟は一括して編年している。また、孔子五十四歳の条のように、異なる文献であっても、共通性を認め、一事とすることも存在する。

本稿で検討したのは『孔子編年』の編年の手法とその特徴のみであった。宋代において流行した編年体の著作との関係、他の孔子の言行を編年した著作との異同等と課題は多い。全て今後の課題としたい。

注釈

(1) 『孔子通紀』への『孔子編年』の影響は拙稿「潘府『孔子通紀』

初探」(『國學院雜誌』一一八卷九号、二〇一七) 参照。

(2) この他には、陳功文氏「胡仔『孔子編年』編纂及版本流伝」(『図書館工作与研究』第一号、二〇一五) があり、『孔子編年』の版本を整理している。

(3) 『編年』巻首、孔子編年後序「培鞏幼時、即思讀其書。辛未而後、遊歷南北、過書肆、輒訪求焉。不可得。…故訪得鈔本、不惜巨費、購寫以歸。…」

(4) 『編年』巻一の注釈では「謹按『家語』、今本多殘欠。与各書所引不合。是編采『家語』、有与今本微異者、或古本如是茲、不悉校。」としており、『孔子家語』には異なる態度を取っている。

(5) 前掲段氏「胡仔及『孔子編年』考略」には『編年』の引用書目を載せるが本稿とは大きく異なる。

(6) 『家語』弁政「子貢問於孔子曰、昔者齊君問政於夫子、夫子曰、政在節財。魯君問政於夫子、夫子曰、政在諭臣。葉公問政於夫子、夫子曰、政在悅近而來遠。三者之問一也、而夫子応之不同、然政在異端乎。」

(7) 『春秋左氏伝』定公十二年・伝「仲由爲季氏宰。將墮三都。…冬、十二月、公圉成弗克。」

(8) 『家語』相魯「孔子言於定公曰、家不臧甲、邑無百雉之城、古之制也。今三家過制、請皆損之。乃使季氏宰仲由墮三都。叔孫不得意於季氏、因費宰公山弗擾、率費人以襲魯。」

(9) 『家語』曲礼子貢「孔子爲大司寇。国既焚、子退朝、而之火所。

郷人有自為火來者、則拜之。士一、大夫再。子貢曰、敢問何也。孔子曰、其來者、亦相弔之道也。吾為有司故拜之。」

(10) 『論語集解』雍也「包曰、弟子原憲。思、字也。孔子為魯司寇、以原憲為家邑宰。」

(11) 『史記索隱』では「莊子云、孔子年五十一、南老聃。蓋系家亦依此為說。而不究其旨、遂俱誤也。何者孔子適周、豈訪礼之時、即在十七。且孔子見老聃云、甚矣道之難行也。此非十七之人語也。乃既仕之後言耳。」とし、十七歳とする説を批判する。

(12) 孔子世家「孔子年十七、魯大夫孟釐子病且死、誠其嗣懿子曰、孔丘聖人之後、滅於宋。…」なお、『史記索隱』は「賈逵云、仲尼時年三十五。是此文誤也。」とする。

(13) 『春秋左氏伝』昭公七年伝「曰礼人之幹也。無礼無以立。吾聞將有違者。曰孔丘。」への杜預注「僖子卒時、孔丘年三十五」の疏に「当言三十四。而云五、蓋相伝誤耳。」とある。

(14) 『家語』觀周「孔子見老聃而問焉。曰、甚矣。道之於今難行也、吾比執道、而今委質以求當世之君、而弗受也。道於今難行也。老子曰、夫説者流於弁、聽者乱於辞、知此二者、則道不可以忘也。」

(15) 『家語』本姓解「至十九、娶于宋之上官氏。生伯魚。魚之生也、魯昭公以鯉魚賜孔子、榮君之昵。故因以名鯉、而字伯魚。魚年五十、先孔子卒」

(16) 『編年』卷一「甲戌、魯昭公十五年、年二十五。孔子合葬母於防、

曰、吾聞之、古也墓而不墳、今丘也東西南北之人也、不可以弗識也。於是封之、崇四尺。孔子先反。門人後、雨甚。至、孔子問焉。曰、爾來何遲也。曰、防墓崩。孔子不応、三、孔子泫然流涕、曰、吾聞之、古不修墓。」

(17) 『編年』卷五「孔子蚤作、負手曳杖、逍遙於門、歌曰、泰山其頽乎。梁木其壞乎。哲人其萎乎。既歌而入、當戸而坐。…子殆將死也。寢疾七日而沒、夏四月己丑也。」

〔キーワード〕 孔子、胡仔、『孔子編年』、孔子世家、編年体